

IV. 八倉比壳神社古墳群測量調査概要

調査場所 德島市国府町西矢野531

調査期間 平成4年7月10日～8月24日，9月16日～9月19日

調査面積 約3,000m²

1. 古墳群の立地と周辺の古墳（第1図）

八倉比壳神社古墳群は、徳島市の西端に位置する気延山山塊から南へ派生した支脈のひとつが東に折れる所の標高約116mに位置する。当地には、大日靈尊を祭神とし延喜式内社として知られる八倉比壳神社が鎮座し、古墳群はその社殿のちょうど裏にあたる。木々が視界を遮らなければ、徳島平野越しに淡路方面が一望できる立地である。

ここで、八倉比壳神社古墳群をとりまく周辺部の古墳を、徳島市域に属する気延山中に限って概観しておく。まず同古墳群の立地する尾根がさらに東へ延びた先端部、標高約45mの舌状丘陵上に、全長約37.5mの前方後円墳である宮谷古墳が所在する。平成元年度の



第1図 八倉比壳神社古墳群位置図（『石井』2万5千分の1）

- | | | | |
|-------------|--------|-----------------|---------|
| 1 八倉比壳神社古墳群 | 2 宮谷古墳 | 3 奥谷2号墳 | 4 奥谷1号墳 |
| 5 城山神社古墳群 | 6 矢野古墳 | 7 曾我氏神社古墳群（石井町） | |

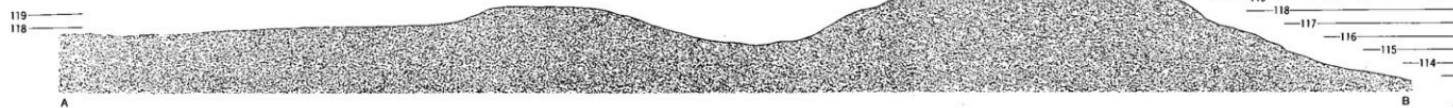
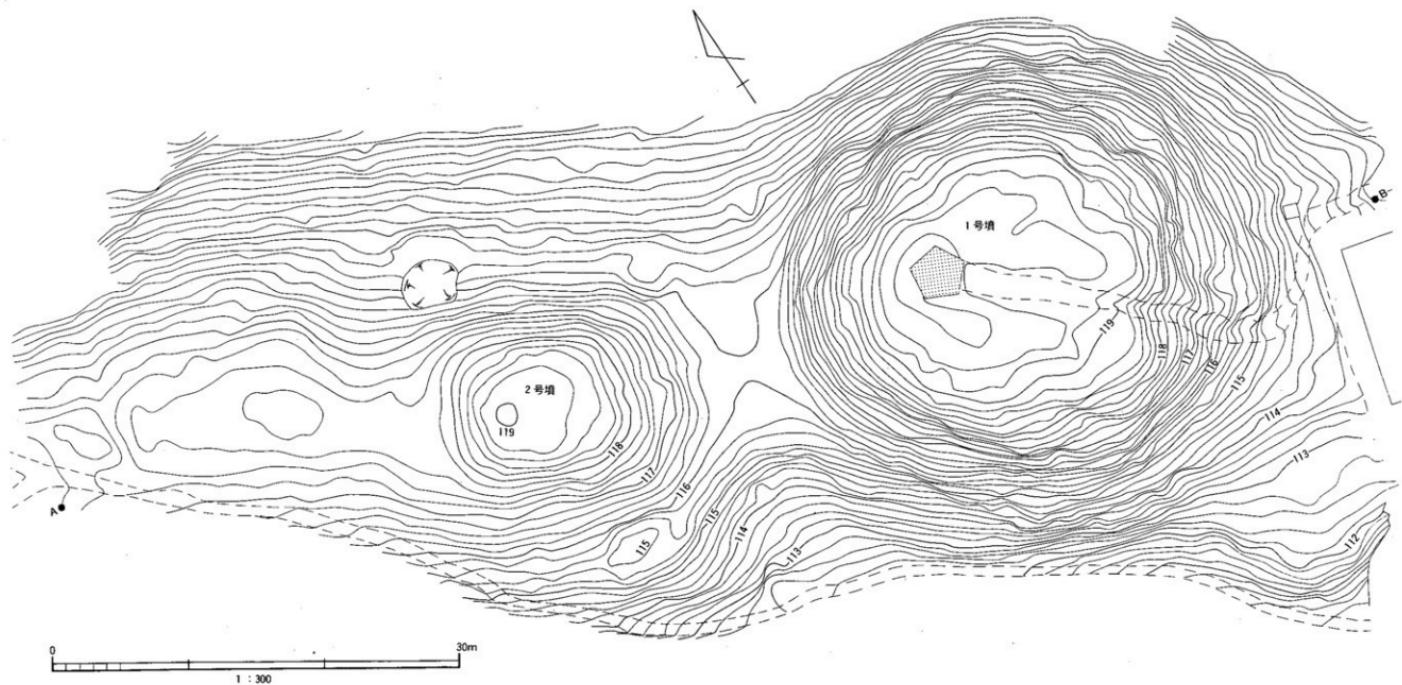
墳丘トレンチ調査で前方部先端付近から3面分の三角縁神獸鏡が出土し、翌年主体部（堅穴式石室）の調査を実施した古墳で、出土土器より4世紀初頭の築造年代が考えられる。北の尾根へ目を転じると、同古墳群と同じ標高に、突出部をもつ積石塚で2基の堅穴式石室と箱式石棺1基をもつ全長約18mの奥谷2号墳が立地している。⁽¹⁾昭和55年の調査時の出土遺物は僅少であるが、宮谷古墳にやや遅れて出現した古墳と認識されている。この尾根がさらに東へ延びて間もなく平野部に達しようとする標高約35mの地点には、県下では唯一盛土による前方後方墳である全長約50mの奥谷1号墳が立地する。内部主体は不明であるが、墳丘裾部において円筒埴輪列が確認されており、4世紀後半の年代が考えられている。⁽²⁾この奥谷1号墳の立地する尾根が一度鞍部を形成してさらに南東方向に舌状に延びた丘陵が、戦国時代矢野氏の居城跡として知られる矢野城跡である。この丘陵の頂上付近には2基の古墳の存在が想定されており（城山神社古墳群）、うち2号墳は、昭和63年度の史跡公園園路敷設工事に先立つ確認調査で、横穴式石室を内部主体とする古墳（円墳？）であることが判明、出土須恵器より6世紀後半に位置づけられる。また奥谷1号墳のさらに北尾根には、県指定史跡の矢野古墳が所在する。矢野古墳は径約15mの円墳で、全長約7.5mの両袖式の横穴式石室が南向きに開口している。出土遺物は不明であるが、6世紀末～7世紀初頭の築造年代が考えられ、氣延山古墳群の中では最終末期に位置づけられている。⁽³⁾

以上、現在認知されている主要古墳について概観したが、これらはいずれも氣延山中腹以下に位置している。しかし、中腹から山頂部に至る尾根上に古墳が存在する可能性がないわけではなく、今後も分布調査と測量調査を精力的に行っていく必要があろう。

2. 調査の目的と調査経過

徳島市制100周年記念事業の一環として、史跡ならびにその歴史的環境を保全・整備し活用することを目的とした「阿波史跡公園」の建設が、氣延山東麓の約45.2haを対象に、昭和63年度スタートした。公園建設は現在、主要古墳の保全整備と周辺部関連施設の整備に重点をおいて、徳島市公園緑地課により年次計画的に推進されているが、史跡公園という性格上、市教育委員会の文化財当局もこれと連携するかたちで分布調査、発掘調査等を実施し、史跡の保存整備にあたっている。

今回、八倉比売神社1、2号墳と呼称して測量を実施した2つの小丘は、凡そ古墳として既に識者の知るところではあった。だが、これらは本来神社所有地に所在するため史跡公園整備対象区域外にあたり、したがって今回の調査も、史跡公園整備事業とは直接関連



第2図 八倉比売神社1, 2号墳墳丘測量図
(コンタ単位:m)

しないものである。しかし、同古墳群は気延山古墳群のなかでも主要古墳として把握されるべきものであり、気延山古墳群の形成・歴史的変遷過程を考えいく上で将来極めて重要な位置づけがなされるものと思われ、また、周辺部の古墳等史跡に対する認識をより深めていくことによって、史跡公園の性格が十二分に発揮され、史跡公園として本来あるべき姿が実現されていくものと考え、今回測量調査を実施するに至った。

調査にあたっては、2カ所の高まりのうち東側を1号墳、西側を2号墳と仮称、7月10日午後に近くの四国電力送電線鉄塔基部の標高基準点よりレベルを引き、12日からまず2号墳の測量に取りかかった。前述のとおり当地が神社所有地ということで、測量を進めるにあたっては樹木の伐採、枝払いを一切行わないという条件が伴ったため、スタッフ6人であたったものの測量は当初予想した以上に難航した。実質10日で2号墳と周辺部の尾根自然地形の測量を終了。引き続き1号墳の測量にかかったが、途中、平野部集落遺跡の緊急発掘調査が入ったため一時中断、同調査終了後に即時再開し、予定範囲の測量を完了したのは9月19日であった。

3. 調査成果の概要（第2図）

東南東方向に向かって延びる尾根の主軸に沿って、山頂寄りに2号墳、平野部寄りに1号墳が並立し、2基間の距離は8m前後を測る。尾根は1、2号墳間の南斜面部において深いくびれを呈するが、古墳築造に際する地山整形によるものか否かは不明である。ちなみに尾根の背の平坦部の幅は1、2号墳の間部分では14m前後である。

1号墳は円墳である。北西裾部の一角において、結晶片岩の割石が小口積みされている状態が偶然の露出により確認された（図版1：下）。ボーリング棒による積石下部の状況確認により、同墳の基底部を構成するものと判断され、このことも考慮すると推定径約35m、現高約3mの規模になる。葺石露出部での基底部の標高は約116mを測る。なお墳頂部は削平により広い平坦面をなしている。墳丘東斜面ではコンタの密な部分（117.2～118m）と疎の部分（116.2～117.2m、118～118.6m）がわずかに認められ、段築が成されているものと考えられる。

2号墳は一辺が推定約20mの方墳と考えられる。墳丘コンタの一部が、収束せずに一度くびれをもつて山頂側に開いていく部分が存在することから、前方部もしくは突出部が存在する可能性もあるが、墳丘部との高低差が大きいこと、尾根地形として自然な連続性が認められることなどから、その可能性は極めて低いと思われる。墳丘基底部は1号墳とはほぼ同レベルに位置するものと思われ、現高は推定約2.5mを測る。現墳頂面での1号墳との高低差は、一約50cmである。

4. まとめ

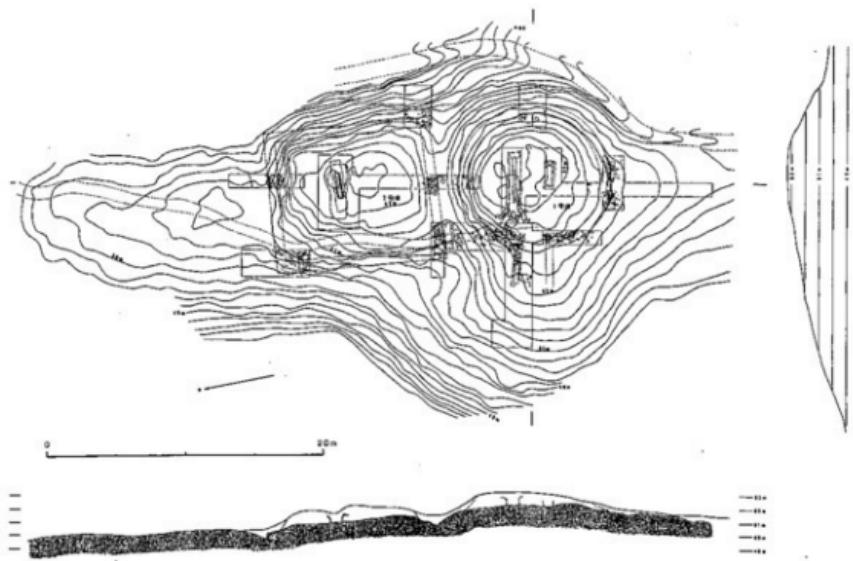
今回の調査は測量のみであったため、古墳の正確な規模や構築方法、外表施設など諸特徴の解明には至らなかったが、従来考えられていたとおり2基の古墳の存在が立証され、1号墳が円墳であることはもとより2号墳が方墳である可能性が極めて強いことが指摘される点などにおいて、大きな成果が得られたと言える。以下、前節の補足もふまえながら若干の所見を述べてまとめとしたい。

① 立地について 1、2号墳ともに気延山のほぼ中腹である標高約116mに立地する。同標高に立地する古墳としては奥谷2号墳があるが、現在のところこれらより高所に位置する古墳はほとんど認識されておらず、従って気延山古墳群中では高所古墳と言える。

尾根の主軸に沿って1、2号墳が隣接して築造されており、1号墳は尾根の背幅を最大限に利用している。2号墳西側は、さらに1基（あるいは前方部？）が構築され得るだけの平坦な地形を成すが、その存否については今回の測量は検証できなかった。

② 墳丘規模・形態について 1号墳は推定径約35mを測る円墳であるが、これは県下に所在する円墳のなかでは土成丸山古墳⁽¹⁾、美馬町の太鼓塚（段の塚穴）⁽²⁾に继ぎ3番目の規模を誇る。削平により本来の墳丘高は不明であり、段築についても本墳丘東斜面においてその可能性が看取されたが、何段築成であるかは不明である。2号墳は、西側（山頂側）突出部もしくは前方部の存在を完全に否定はできないが、一辺推定20m前後の方墳と考える。方墳であれば、名西郡石井町城ノ内に所在する曾我氏神社2号墳（第3図）について県下で2例目となる。あくまで測量上での数値であるが、平面形の規模では曾我氏神社2号墳を一辺10mほど凌駕するものとなる。なお両古墳群には、円墳と方墳が隣接して築造されるという共通性が見られるが、八倉比売神社古墳群が未発掘である以上、その成因について時期差・地域差など古墳群成立の背後に潜在する諸相をふまえたうえで論じることは不可能である。

③ 墳丘外表施設について 1号墳北西部の一角で偶然確認された基底部の石積みは、まぎれもなく古墳外表部の一姿であり、墳丘面に葺石が巡らされていることが想定される。なお1号墳の中～上位部においては、部分的に白色円礫（石英）の露出、散在が認められた。このことから、白色円礫の併用もしくは基底部（～中位部）以上の墳丘斜面は白色円礫のみによって葺かれている可能性もあり、異なる2種類の石材により外表部が創出された古墳である可能性も考えられるが、この点に関しては今後周辺地域での調査等による類例の増加を待って比較検討せざるをえないのが現状である。⁽³⁾



- (2) 徳島市教育委員会『古墳時代の徳島市—埋蔵文化財資料展—』1981年所収「奥谷2号墳」ほか。
- (3) (2)所収「奥谷1号墳」
- (4) 徳島市教育委員会『第9回埋蔵文化財資料展 阿波を掘る—最近の発掘調査と古墳の副葬品—』1988年所収「城山神社2号墳」
- (5) (2)所収「矢野古墳」ほか。
- (6) かつて笠井新也によって、地山を掘り下げた土壙に「弥生式の大甕」を埋置して埋葬施設とする積石塚の存在が報じられている。また徳島市教育委員会が昭和62年度に実施した分布調査でも、気延山山頂から中腹にかけての尾根上に古墳の存在を想起させる起伏部が少なからず確認されている。
- (7) 天羽利夫・岡山真知子・武藏美和「土成丸山古墳調査報告」『徳島県博物館紀要第18集』1987年。
- (8) 天羽利夫「徳島県下における横穴式石室の一様相—その2—」『徳島県博物館紀要第8集』1977年。
- (9) 天羽利夫・岡山真知子「曾我氏神社古墳群調査報告」『徳島県博物館紀要第13集』1982年。
- (10) (9)の付図1「墳丘・遺構全体図」を縮小転載した。
- (11) 鳴門市大麻町の萩原1号墓（3世紀末築造、調査後消滅）において、竪穴式石室を被覆する多量の白色円礫が検出されているごとく、白色円礫の使用は徳島県下の積石塚に認められる属性のひとつとして把握されている（菅原康夫『日本の古代遺跡 36 徳島』1988年、保育社PP69）。八倉比売神社1号墳の白色円礫も本来は石室上を覆していた可能性もあり、積石塚の系譜をたどれるものであろうか。

付 記

今回の測量調査の意図を御理解いただき、調査を快く承諾してくださった八倉比売神社宮司の岩野忠行氏に対し、衷心より感謝の意を表する。



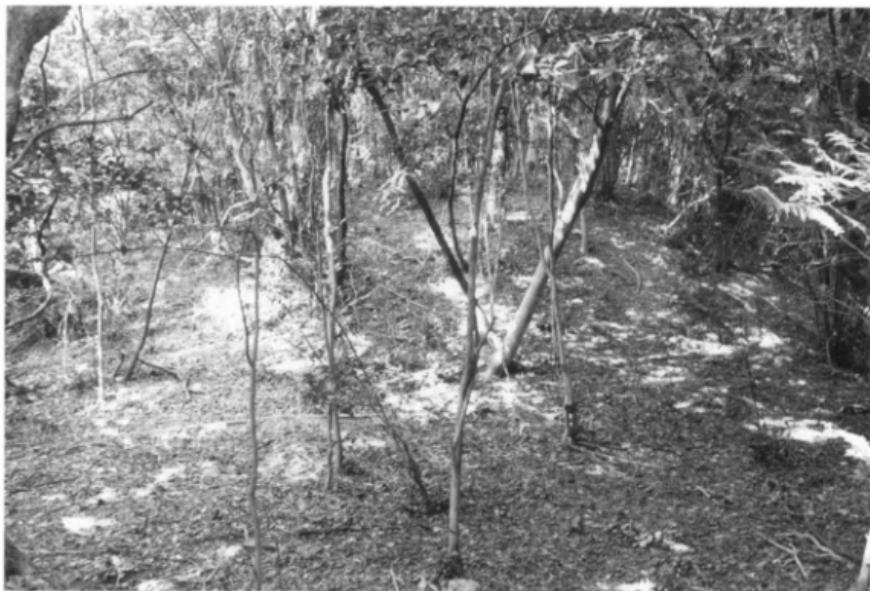
1号墳現況

2号墳より



1号墳基底部葺石露出状況

北西より



2号墳現況

1号墳より

徳島市埋蔵文化財発掘調査概要 3

1993. 3.30

編集 徳島市教育委員会社会教育課
発行 徳島市教育委員会
印刷 グランド印刷株式会社